



「病院はRC造」の固定観念を捨てて、
老舗施設が下した“木造”という選択。
“木”という素材が優しさと経済性を生む



佐久の地で、2世紀近く地域医療に貢献してきた金澤病院の地元への思いは極めて熱い。将来に備えて建て替えを計画した際にも、院長の新病院への要件は「患者に優しい」であった。その「優しさ」を具現化する技術として、院長は自身の経験を踏まえて“木造”を選んだ。設計・建設の知恵が注がれ、結果、日本でも有数の大規模木造病院の完成となった。

選者／考察者 岩堀幸司（建築家）

this month Architecture

医療法人三世会
金澤病院

か

つて、中山道の重要宿場であった長野県佐久。医療法人三世会金澤病院は、現・佐久市の中心部である岩村田において、長年にわたり地域医療を支えてきたことで同地では著名な施設である。

その歴史は江戸時代にまで遡る。天保4（1833）年、初代・金澤宗伯が長崎で医学を学び、嘉永元（1848）年に御影陣屋の典医となつたことが嚆矢となる。193年前のことである。明治2（1869）年には、小諸市御影に医学教育施設「御影医学館」を設立しており、以来西洋医学の普及に取り組んできた。その歴史は何と2世紀弱にも亘る。

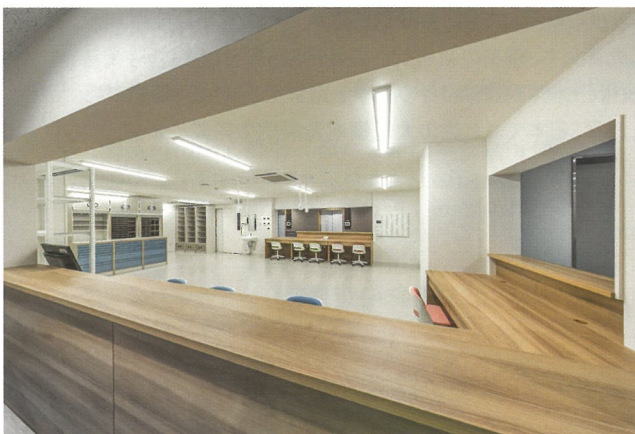
現在は一般病床52床、療養病床30床の計82床に加え、63床の介護医療院や居宅介護支援事業所等を運営する。約140人の職員が「患者さんに優しい病院」を理念に掲げ、医療と介護を切れ目なく提供する体制づくりを進めている。

院長の自宅から始まった

2019年、急速な高齢化に伴う医療・介護需要の増加を見据え、それに対応すべく同院は新しい病棟の建設を決定した。計画の概要は、道路を挟んだ旧駐車場跡地に新しい病棟を建設し、既存病棟は介護医療院として活用するというものであった。この計画の最大の特徴は、3階建ての病院を木造（枠組壁工法Ⅱツ）



1階の待合室。一見、従来の木造のイメージからかけ離れたスペースが広がる。奥が主玄関。右の木調の壁の裏が中待合室



2階スタッフステーション。広さは十分であり、かつカウンター上の開口部も大きい



1階には重量物となる手術室、放射線診断機器（CT、MRI等）が配される

バイフォー工法)での建設である。

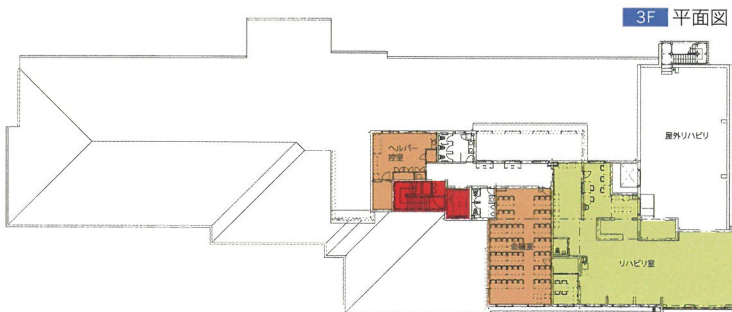
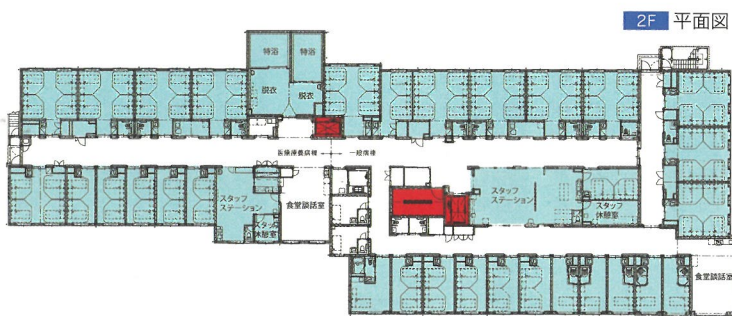
同院の5代目となる金澤政之院長は、自宅を木造で建てた際に木のぬくもりに感銘を覚え、それが患者やその家族への「優しさ」に繋がることを確信。同時に、病院スタッフにとっても心地よい空間につながると考え、この工法を採用したという。

建築基準をクリアー 低コスト化も

一方、今や木造による高層建築も珍しくなくなったものの、全ての建築物が可能ということではない。特に病院建築においては、耐震性や耐火性、遮音性、断熱性など厳しい基準を満たす必要がある。しかし、その山積した難題を設計・施工会社が見事に解決した。

同院は3階建てであることから、1時間耐火構造の木造枠組壁工法を採用し、建築基準を満たしたという。その慧眼には恐れ入る。

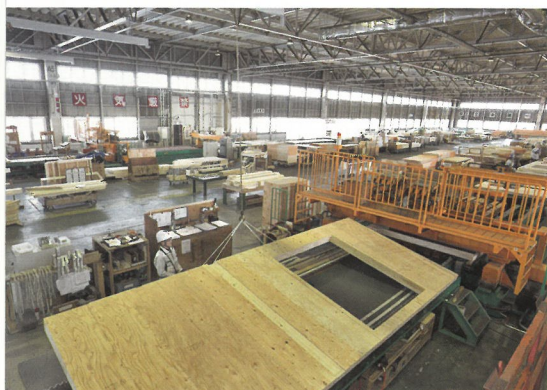
なお、同工法は床・壁・屋根を工場ですべて製作するために施工精度が高く、品質が安定するのが大きなメリットにあげられる。また、木造は鉄筋コンクリート(RC)造より建物が軽いため基礎工事の負担



を抑えられ、かつ工期も短縮することからコスト削減にもつながったというのは、副次的という表現では収まらないであろう。

150㎡の大空間も創出可能

枠組壁工法は壁で建物を支える構造であることから、柱や梁の張り出



工場での壁パネル生産光景。
工期と精度の確保に大きく貢献

しが少ない。その結果、病室やベッド周辺を広く使える開放的な空間を実現することに寄与している。一方で耐力壁の配置には制約があるものの、同院の手術室は約5・9m×6・65m、待合室は約90㎡の広さを確保する。ちなみに、最上階では梁や補強壁を工夫することによって、150㎡を超えるリハビリ室が設けられている。

なお、外観や内装には木以外の仕上げ材が使われているため、木造と判別できるのは建築関係のプロだけではないだろうか。

「木造」ならではの快適性

ただ、見た目では分からなくても、木造ならではの特徴は、各所に現れている。まず、床の感触である。木造の床や壁には適度な弾力があることから、RC造に比べて足腰への負担が少ないのである。院内を一日に一万歩以上歩く看護師などからも、疲れにくくなったとの声が寄せられているというが、実際に歩いた筆者も同感である。

また、木造であることから危惧される遮音性であるが、幹線道路沿いでありながら結構な速度で走り去る大型車両の走行音も気にならないのには感心した。

なお、熱伝導率の低い木材の特性（RCの10分の1、鉄の350分の1）により、佐久市の厳しい冬（氷点下10度を下回ることも）でも暖かく、



2階廊下。幅も十分であり、取材時、すぐに歩きやすいことに気がついた

夏は涼しい室内環境を維持している。当然、エアコンの効率は良く、電気料金が少なくなるのも自明である。

将来の需要に柔軟に対応可能

平面計画にも、壁構造（枠組壁工法）に伴う空間的な特徴がある。同院では、東西方向に連続した耐力壁で構造を成立させているが、それにより独特な間取りが生まれている。例えば1階のロビーでもある待合室だが、診察室の前にもう一つ中待合室がある。両室を隔てるのは壁。平面図だけを見れば、これが無ければより広々とした空間が獲得できると思えるのだが、この壁は構造上必須のもの。しかし、実際にその場に立つと、この壁が「いい仕事」をしていることに気がつく。中待合室は、期せずして診察前の緊張感を和らげる静寂な空間を創り出すことに寄与していることは明白である。



2階4床室。暖色系の壁と明るい木目調の床の効果がまさに「優しい」

他にも、スタッフステーションは複数の大きな開口部を持つ壁で囲まれているのだが、親しみやすい空間を演出しているのが好ましく思えた。さらに、上下階の壁位置をそろえた設計により、病床のレイアウト変更にも柔軟に対応できるのも高く評価できる。将来的には一般病床と療養病床の比率を変更することも可能としている構造であり、経営的にも貢献するものである。

※

近年、木のある空間が人の心身に良い影響を与えるという研究も進んでいる*。金澤病院の取り組みは、木造建築の特性を医療施設に生かし、快適性と機能性、コスト面のバランスを追求した事例である。

地域医療の歴史を受け継ぎながら、新しい病院づくりに挑戦した同院の実践は、今後の医療施設建築を考える上でも大いに参考となる取り組みといえる。

*参考文献：東京大学×三井不動産グループ
「木の空間は身体に良い」を科学的に証明する
<https://www.youtube.com/watch?v=qfsXp9Z8pn4>

医療法人三世会 金澤病院

所在地：長野県佐久市岩村田807
病床数：82床

【建築概要】

工事期間：2023年1月～2024年4月
敷地面積：4,354.43㎡
建築面積：1,882.79㎡
延床面積：3,901.26㎡
構造規模：地上3階建て 木造枠組壁工法 耐火建築物
設計施工：三井ホーム
設計協力：メドックス



3階リハビリルーム。適度なクッション性を持つ床は、転倒時のリスク軽減にも貢献



2階にある談話室。八ヶ岳連峰などの山々が望める。窓の開口部も十分